

一茶と二六庵

——新出葛飾俳書『中村一馬三回忌追善集』から判ること

矢羽勝幸
渡辺洋

一、緒言

一茶の俳諧は、関東俳壇の一角を占める葛飾派グループから出発した。同派の指導者溝口素丸・森田元夢・小林竹阿に師事し、竹阿の二六庵にろく二世を継承した。「二六庵」は、葛飾派内の主要俳人（判者）が名乗ることができた特別な庵号である。

本稿は、一茶と二六庵とのかかわり、名乗った時期等について新資料をもとに明らかにするものである。

二、一茶の修業期と二六庵——前期

師の一人竹阿は、寛政二年（一七九〇）三月、江戸本所の竹屋弥兵衛方で八十一歳の生涯を閉じた。一茶はその最晩年竹阿に親炙し、天明七年（一七八七）十一月、竹阿の二六庵で『白砂人集』を书写している。竹阿が没するとその遺文集

『其日ぐさ』を書写（寛政二年—同四年推定）、巻末に署名、「二六庵」と「一茶」の二印を捺している。「二六庵」の印は竹阿から譲られたものであろうか。

寛政四年から六年余、一茶は西国各地を巡った。修業としての旅行である。この間、先の「二六庵」の印を携行し、諸方で「二六庵一茶」と自称している。

愛媛県土居町の俳人山中時風を訪問した折（寛政四年推定）、

入野の風君を訪ふ。あはず。

霧晴てゐる野に曇るあるじ哉

右 東武二六庵 一茶

の一紙を残し、今も同家に伝わっている。

寛政七年四月には奈良県桜井市の植田吐雲を訪い、同家の『吐雲訪問句画帖』に

空見つ倭の名処一見せばやと河内の国ゆ山ごえしてやすらふ折から此国中眼下にみゆれば忽炎日の眠気散じて

遠かたや青田のうへの三の山

むさし笠、雲水 一茶⁽¹⁾

印印

を揮毫した。二顆の印のうち上は「二六庵」、下は「家在墨水」と刻されている。

いまだ修業中の一茶が由緒あるこの庵号を正式に襲号していたかどうか甚だ疑わしく、一茶の勝手な僭称であろうとするむきもある。行脚中一茶が刊行した『たびしうる』『さらば笠』に二六庵号がなく、また江戸で刊行された葛飾俳書に「二六庵一茶」と記す作品がないからである。

三、その後の二六庵——後期

葛飾俳書に「二六庵一茶」の号が初めて登場するのは、寛政十二年（一八〇〇）桂洲が編集した歳旦帳『庚申元除楽』である。

よい程の道のしめりや朝霞 二六庵 一茶

桂洲は享和二年（一八〇二）に葛飾派の宗家其日庵五世を継ぐ関根白芹である。歳旦に入集している事実からすると、二六庵号はすでに前年中に許可（当時の宗家は四世加藤野逸）されていたと見るべきである。

寛政十二年、一門の判者横山徳布が『庚申元除春遊』を刊行した。中に
人並に正月を待つ灯影かな 二六庵 一茶
が収められている。

享和元年（一八〇一）には、宗家四世野逸が『其日庵歳旦』（仮題）を刊行、

中々にかざらぬ松の初日哉 二六庵 一茶

ほかに二句が収録されている。

従来の研究では、葛飾俳書に登載された「二六庵一茶」作品は右の三部のみで享和元年をもって二六庵を放棄ないしは宗家（白芹）から剝奪されたと思なされていた。

しかし、ここに新たに「二六庵一茶」作品を収録する葛飾俳書が出現した。すなわち本稿に紹介する『中村一馬三回忌追善集』である。本書の刊年は享和三年十二月であり、一茶の二六庵在庵は二年ほど延長したことになる。

四、『中村一馬三回忌追善集』書誌

本書は半紙本・一冊、十一丁。題簽が欠損、内題もないことから右のように仮題する。表紙は表・裏とも欠損。白糸綴。編者は一馬の子岸松（二世）と推定される。天部を大きく明けて、半丁八行書き。巻末に刊記「享和三癸亥季冬」がある。序文は「やいつ」こと加藤野逸。跋はない。末尾を飾るのは宗家白芹である。一茶記念館の所蔵。

五、翻刻

翻刻に当って、文章には句読点、片仮名は原本のままに残した。丁移りは「」で示し、下に丁数と表（オ）、裏（ウ）を明示した。

万事楼一馬ハ岸松と呼びし頃より予が門に遊ぶ事年あり。先年判者の列にも加ハリしが日比いたつきに苦しミ、臘月朔日ハ其日庵月並の会納、ことに俳筵も此年限り、譲るべきころあればまことの納ならむとおして席へハ出けれども息づかひも苦しげに終日柱にもたれ居りしが、果して其月中の五日」（一オ）五十九才を期とし身まかりぬ。一とせ上毛館林あたりへ杖曳し頃は老の頭陀たすくれしも此ごろの様に思ハるれ。ましてならハぬ旅の空、帰らぬ道に先だてゝ行もとまるもあかぬ名残のおしくやハ、今年三周の追善に今の岸松、諸君より賜ハる佳句をも手向艸になしてんとぞ。よし父の好める道、至孝いはんかたなしと小冊なんぬ。」（一ウ）

酒飲めとすゝめしもいッ塚の雪 七六庵 やいつ

四季吟

一馬居士

まだ窓に心置く、余寒哉

春の雨柳の糸をしごきけり」(二才)

苜蓿に把ねこんだり鹿の角

山吹や折らんとすれば水の底

三年ハ継子育てや桃の花

酔ざかなの世となりにけり遅桜

青梅や花折し枝をかぞへたて

青麦や足から吹くハ青嵐

葉桜や又爰らから薫る風

汗ばむだやうに咲けり苔の花」(二ウ)

涼しさやちとせを延る渡し守

腰かけて我家に更る納涼かな

五月雨や用意に着たる菰粽

いなづまや片仮名書る筆走り

つゞれさす柴火のもとやきりぐす

小車に乗すればいそぐ日脚哉

住(種)寺なき寺に大破の芭蕉哉

淋しさに引けば鳴子の猶淋し」(三才)

野分してからくり違ふ野山哉

どの雲も只ハ戻らぬ時雨かな

盲亀にハ浮木も有を海鼠哉

不掃除の池に曲ある深雪哉

窓ひとつ梅に残して冬籠

傾城のひとり寝る夜やとし忘

御手洗に遊ぶや雄雌の鳥甲

「(三ウ)

贈り賜ひし玉章かいやり置しもほるなく、又父のしたゝめ置れし一まきの反故今見いでたるにありしながらの佛さへそひて悲し。これらを誌して大祥忌を弔ふのミ。

夢三とせ寒さもしらず父の恩

二世 岸松

捧る櫛櫛の筒水る朝

菜国

塩荷つむ牛ハ行先合点して

亭鳥

富る領主に橋ハ出来たり

真松

栗焼を月の儲の太郎冠者

旦雪

笑ひを誘ふ菌なるべし

東松」(四才)

宮木引く山路ハ風の冷まじき

其松

地藏の側にひと夜寝にけり

一松

百敷の位官も恋に踏はずし

桂国

薫るばかりの手なら文なら

平坡

出しかねる金も隠居のぬくめ鳥

魚交

そろ／＼闕て月も行とし

左桜

碓につけて六祖の物がたり

木葉

島田泊りも川のおくまで

南李「(四ウ)」

朝鷲に晴る日和の又曇り

野月

紫屋でも同じ明後日

志丈

口先の上手も江戸の花なれや

何竜

しばし柳に咲て淡雪

移文

御秘蔵の雛と端居に酒酌て

徐行

占も慰ミ想もなぐさミ

李芳

市立ぬ日は難波津も物静

涼渚

菖蒲の軒の香を送る也

独醒「(五才)」

ほと／＼ぎす鞭打駒の魁に

北文

されば赦免も読経他事なし

止鳥

荒波の寄せてハ戻りもどりては

菜雨

小春長閑にかすむ夕暮

渡来

すへ仕廻ふ灸に窓の釣簾上て

一鶯

家中ハ家中だけの窮屈

松井

矢橋からほどなき月の鏡山

蘭袴

霧吹払ふ北風の冴

雲衣」(五ウ)

最多角に眼ハ鴟の蘇民書札

素国

ひよんな所へ無尽飛んだり

巢居

三か村合せて家ハ二十軒

和艸

殿も遊山ハ触の緩がせ

万秀

咲初る花は彼岸の御法より

竹馬

百囀に群る友鳥

執筆

」(六オ)

けふや大祥忌にあたれば記念の文台を

居へて

三ツ物に時雨諷ふや手向鳥

雪堂 菜国

をのく詞書略す

豎川

音楽に雪の花ふる三年かな

亭鳥

ふりにしや三とせを今日の雪仏

真松

袖におく霜も三年の手向かな

東松

はや三とせ袖に時雨や塚の前

其松

咲にけり塚の茶山花二三輪

一松〔六ウ〕

淋しさもはや三とせなり枯柳

和艸

三年めや潜りく／＼てとし忘れ

万秀

はや三とせ雪に戻らぬ空もなし

呉陸

深川

世の罪もしらで枯野やひとり旅

平坡

炭がまに焼て手向んほそ煙

魚交

口切や薫りもぬけず三年越し

木葉

鐘の音ハ尾上にくれて時雨哉

南李〔七才〕

伏せ鉦の冴る霜夜の野寺哉

李芳

涕を音に残して紙衣かな

凉渚

しぐるゝや陸む雀の手向声

独醒

涼暖の庵思ひ出す寒さ哉

徐行

涕と思へばはかな雪ぼとけ

野月

小名木川

手向べき花とてもなき深雪哉

止鳥

静さハ香にまとふや雪の宿

菜雨」(七ウ)

いつの間に散て淋しや枇杷の花

渡来

茶の花に暁しづかなり大祥忌

一鶯

南下水

寒念仏聞につけても哀れ也

秀夫

寒垢離や身にしミくくと袖ぬるゝ

芝積

柳嶋

馮に鞭冬の日はやし大祥忌

左桜

忌日とて庭にも敷り六の花

移文」(八才)

梯の春ハ来にけり帰り花

志丈

哀れとも御法の声や鉢たゝき

何竜

過る日や忘れ記念のふる暦

ヨコ川
竹馬

節季候やその光陰も三年忌

小デンマ
北冬

思ひ出す巨燵にいとゞ寒さ哉

両ゴク
桂国

かの岸の雪や掃くらん今日さす

久松丁
松井

ありくくと咲てはかなし帰り花

両ガヘ丁
雪衣

行としや何問ふにも片便

木ビキ丁
素国」(八ウ)

ひと構へ造るや墓の霜ばしら

キク川丁
巢居

鉢敲き三人り落合ふ連夜哉

シン川 蘭袴

日の脚の追ふや枯野の駒ひとつ

馬喰丁 祖栗

夕風も手向に散るや木の葉雨

ヲクト 室戸

一時雨はれ行西の御国かな

応日庵 素雄子

三周の哀れやとしの日の弱り

上毛タテ林 旭水」(九才)

やかましき世を見捨てや年の暮

草加 冬松

帰りても咲ず実の枯木かな

新方備後 尺 風松

思ひ出す菊や枯野の骨斗

大泊 素水

山住のちどりに寒き寢覚哉

尺 和光

今朝見れば最う仏也峯の雪

松伏 尺 蘭戸

手向ばや雪の櫛ヒの枝ゑらミ

尺 雲路

花となり実となり年の枯野かな

赤岩 玖元

風なくバ飛ぶまじものを松の雪

野雲」(九ウ)

いさゝかの雪にどふして朽葉哉

蘭台

手向ばや我ハ枯草ひと束ね

兎遊

雪に霜に花ハ咲ども枯野哉

杉司

三年の巡りはやき事を聞て予も香を捻る

音信る、厂よちどりよ雪の庵

大白堂 桃隣

一馬居士の三周忌に申贈る

師走嘸古ことの葉魂迎

蕪庵 白蒜

霜や水残るものとてなかりけり

松雪堂 雀里 (十才)

あらためぬこそよし年の魂祭

白兔園 宗瑞

喪ごろもハ捨よと衣を配りけり

めじろ山人

一馬居士三回忌の事野逸老人より

告来しに袖しほりて

水くきの跡や月雪古くわいし

珪琳齋 蓮之

涼暖舎主人ハ予が往来足を休め語らひ

しがはや去て三とせになりぬ

杖かりし夜ハおと、しよ門の雪

二六庵 一茶

跡訪ふや空も涙の玉あられ

梅堂 蘭山

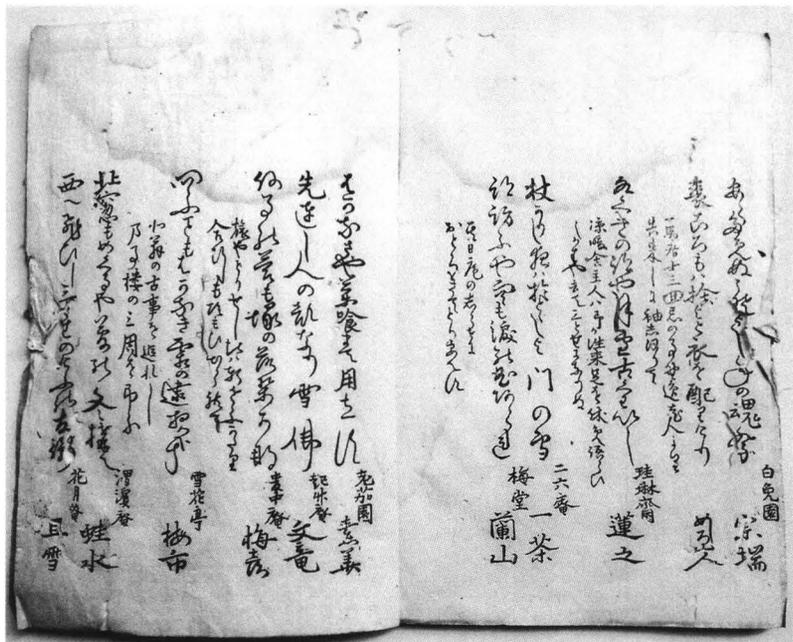
其日庵のしらせにおどろきてとりあはず (十ウ)

はかなさや薬喰まで用立ず

老茄園 素華

先達し人の顔なり雪仏

起竹庵 文竜



何事の答も塚の落葉かな

麦中庵 梅彦

旅やどりせし比ハ軒をふかたり

合ひしもおもひ出られて

問ふこともはかなき霜の速夜哉

雪花亭 梅市

北翁の古事を追れし万事楼の三周を弔ふ

北窓もめぐるや夢の冬構

渭浜庵 蛙水

西へ飛びし三とせのけふの友衛

花月庵 旦雪」(十一才)

一馬居士の大祥忌を悼て

思ひ出す三冬の空や鐘の声

天地庵 我泉

生前に一馬の名ハ野逸老人よりゆづり給ふ折から予傍にありて別号ハ万事楼なるべしと興ぜしを直になづけて一盧をもふけ月並の会をいとなミしがはからずも泉下に至りてはや三周の忌とハなんぬ。嗚呼是人間万事塞翁馬。

師走るや隙行駒の三日の月

其日庵 白芹

享和三癸亥季冬

」(十一ウ)

六、一馬について

本書の主人公一馬について簡単にまとめておきたい。

錦江編『葛飾蕉門文脈系図』(『俳書大系』)によると、野逸門下のトップに次のように記されている。

一馬 万年楼 始岸松 中村清兵衛

安永七年野逸翁の門に入り、一馬の名をさづかり、寛政九年丁巳二月判者にすゝむ。

「万年楼」は「万事楼」の誤植である。この号は『中村一馬三回忌追善集』の白芹句により白芹が命名したことが知られる。

所載俳書を一瞥すると、寛政十一年徳布編の『己未元除春遊』に

野馬台の指図や年の人遣ひ

一馬

卷末に近い高位置に出句している。

同年刊・野逸編『其日庵歳旦』（仮題）に

頌

菌固やまだ頼ある照りごまめ

万事楼 一馬

七曲の蟻の往来や春おろし

のほか付合が二句見える。注目すべきは「豎川万事楼連」として英松ほか九名の発句が収録されていることである。一馬は判者であったのだから当然門人が居り「連」を組織していた。九名の中には讃岐高松の白峯も加わっているから「豎川」は一馬の居住地であろう。豎川は隅田川と中川とを連絡する運河の称で本所を東西に直流している。現在この地は東京ゼロメートル地域で、水位が地表面より高い。

また寛政十二年、徳布の編んだ『庚申元除春遊』の卷末にも

言訳の訥もどかしや年の掛

一馬

が収録されている。

一馬は享和元年（一八〇一）十二月二十五日、享年五十九で没した。一茶より二十歳の年長であった。

七、一茶作品

本書所収の一茶作品は、

涼暖舎主人ハ予が往來足を休め語らひしがはや去て三とせになりぬ。

杖かりし夜ハおと、しよ門の雪 二六庵 一茶

である。これを一茶の句日記『享和句帖』⁽³⁾に当たると

杖かりし夜はおと、しよ門の雪

涼暖舎主人は予がゆきに茶などもてなき〔れ〕しもはや三とせに

□□^(二首)主人は予がゆきに足を休めら〔れ〕しもはや三とせにと、^(二首)

享和三年九月十二日の条に記されている。句に変化はないが前書きを推敲（二案）している。「予がゆき」は「予がゆき」、〔二言カ〕は「一馬」が正しいことが判明した。全集の誤りが訂正できたことはうれしい。「涼暖舎」は他に見えないが、一馬の別号の一つであったことが知られる。

八、松井・桂国のこと

本書八丁裏に次の二句がある。

かの岸の雪や掃くらん今日さす 久松丁 松井

思ひ出す巨燧にいとゞ寒さ哉 两国 桂国

ともに一茶ゆかりの人で、松井まついは日本橋久松町の人。其翠楼と号する森田元夢門人。成美・一瓢とともに江戸における最も信頼できる庇護者であった。文化十年五月十六日、六十九歳で没している。

桂国は両国の人とあるが、これは一時的な仮寓で、一茶と同郷柏原の人。本陣中村利為（新甫）の庶子で本名を中村利和といった。父により廢嫡、家を弟（正妻の子）利實に譲り分家した。桂国は長年柏原宿の訴訟業務に携っており、しばしば江戸に出た。享和三年当時何の訴訟であったか明らかでないが、一茶の『文化句帖』の文化元年（享和三年の翌年）一月二十七日条に柏原に帰る桂国を見送った記事があり、享和三年当時桂国が出府していたことはまちがいない。おそらく両国の宿は公事宿ではなかったか。桂国は文化十年十月七日に没するが、子がなく、その家は廢絶している。

九、『一茶園月並』等との関わり

本書の出現によって一茶の二六庵在庵（公称）が寛政十一年から享和三年までの五年間に及ぶことが明らかになったが、享和三年十二月まで在庵したということは、それに続く文化元年も在庵したことであろう。

かつて矢羽は旧著『信濃の一茶―化政期の地方文化』（平成六年刊）の卷末年譜・文化元年の条に「（この年）葛飾派をはなれ、しきりに道彦・巢兆・閑斎・成美らの句会に出席。四月（翌年まで）『一茶園月並』を主催。」と記しているが、これは当時判明していた資料内からの読み込みで、今日「葛飾派をはなれ」の記述は訂正されなければならない。『一茶園月並』も葛飾派二六庵の判者としての活動の一環であったことが知られる。この月並は翌文化二年まで続けていたのであるから、二六庵の号は少なくとも文化二年まで名乗っていたはずである。

十、まとめ

一茶が師竹阿の庵号「二六庵」を名乗ったのは、従来寛政四年から同十年までの西国行脚時代（前期）と江戸に帰って以後の寛政・享和期（後期）と考えられていたが、前期は僭称であった可能性が高い。

後期は葛飾俳書『中村一馬三回忌追善集』（仮題。享和三年十二月刊）の出現によって享和三年の公称、さらに文化一・二年までの可能性が出てきた。そして文化一・二年に主催した『一茶園月並』も二六庵時代の活動と考えられる。

一茶の生涯における二六庵号問題は一茶研究の重要な課題の一つである。葛飾派俳書の精査等なお今後の研究成果を期待したい。

註

- (1) 丸山一彦氏「菊明についての疑問と一茶の新資料」(『一茶全集』月報7。昭和五十三年十一月発行)所載の写真による。
- (2) 前田利治氏「一茶と葛飾派」(『一茶の俳風』平成二年富山房刊行)。
- (3) 『一茶全集』二卷所収。